

在日コリアン社会のチェサの文化変容

——儒教的チェサと仏壇との併祀（へいし）——

李 裕淑

I はじめに

日本に渡って来た在日コリアンは差別や偏見の中で自分たちのアイデンティティを維持しながら、日本社会に適応して暮して来た。しかし、日本に渡って来た一世と日本で生まれ、日本に適応していった世代とは日本に対する見解が違う。一世たちには統一した祖国に帰りたいという強い思いがあった。自分が死んだならば故郷に埋めてほしいと願う一世も多かった。そして、死んだ後は故郷で行われているチェサをしてほしいと願っていた。チェサとは、「一定の方式で食べ物を供えて一定の格式に従って神霊や亡くなった祖先の神に礼をして祈る儀式」¹⁾である。一世たちの日本での苦難の生活をともにし、強い祖国への思いを感じながら育った二世たちは一世のアイデンティティや世界観を尊重しながらも日本の地域社会の市民として日本社会で見聞きする世界観も受け入れていった。日本での生活が長くなり祖国統一の日も訪れず、日本での定住が自明のこととなった。そのため、二世、三世、四世と世代が進むことによって日本社会に適応し、その姿は潜在化していつている。このように、在日コリアンの日本観と価値観を考察するときは、世代ごとに変容して来たという点と多様なアイデンティティにも注視しなくてはならない。

「アイデンティティは固定されたものではなく、環境的文脈の観点から集団や個人を定義し、位置づけるために、変化する傾向がある。さらに、ディアスポラ²⁾のアイデンティティ化には、複雑性と置換性がともなっている。自分の出生地を「母国」とらえる人がいる一方、定位置を重要なアイデンティティの拠り所とする人がいる。そして、ほとんどの場合、複数のアイデンティティが共存している³⁾」複雑な政治情勢・社会環境に置かれた在日コリアンのアイデンティティは一枚岩でなく、複数のアイデンティティを多かれ少なかれ戦略的に選択している。現在、民族の言葉も分からない在日コリアンが大部分であり、日本国籍を持つ人も多くなった。一世が在日コリアン社会を担っていたときは在日コリアン同士の結婚がほとんどであったが、現在は反対にほとんどの在日コリアンが日本人との国際結婚であるため、国籍も日本籍の在日コリアンが増えた。その結果、日常生活の姿からだけでは、何をもって在日コリアンと認識するのか、徐々に困難になってきている。そのような在日コリアンの中でチェサを行っている、チェサに参席しているということは在日コリアンのアイデンティティを現す要素の一つであるといえる。また、在日社会内で変容したチェサは在日コリアンが築いた一つの文化でもある⁴⁾。チェサを継承しているということは国籍が韓国・朝鮮でなくても、また両親が揃って朝鮮半島出身者でなくても自分の出自は朝鮮半島だと認識しているといえる。とくに日本における変容として、日本社会の主流である仏教的葬礼と祭祀文化に接するなかで、それらを違和感なく取り入れて

チェサを行っている在日コリアンの人々がいる。仏壇に置いた位牌に話かけ、仏壇の前でチェサを行う。仏壇とは仏像を安置する壇、寺院の仏堂や信者の家に安置されている厨子・仏龕⁵⁾、また寺院の須弥壇の総称、とされ、一般家庭に常設された仏教の礼拝施設である。また、先祖や身内の位牌を置く場所とされている。仏教施設である仏壇の前でチェサを行うのは儒教的祖先崇拜であるチェサと矛盾しているように思える。しかし、彼らは忌日の前の日には祖先たちが生きていたときと同じように食事をしていただくためのチェササン⁶⁾を準備してチェサを執り行う。チェササンに供えられた食べ物には霊気が宿り、福を頂けるといわれ、供えた食べ物を生きた者たちが分けて食べる飲福もする。このような「儒教的チェサと仏壇との併祀」は朝鮮半島でも、他の地域の在外コリアンにも見られないチェサの形であり、一部の在日コリアンが行う独特のチェサ形式だと思われる。本稿ではこの併祀に関して、どのような考えで日本の仏壇を購入し、チェサの形式にはどのような変化がもたらされたかについてインタビューを行い、どのような世界観がそこにあるかを考察する。

Ⅱ 先行研究

先行研究としては梁愛舜「チェーサと在日朝鮮人社会—世代交代と世俗化を中心に—」⁷⁾があげられる。世代交代が進むなかで在日コリアン一世世代の儒教的信念体系に基づく聖なるチェサの衰退とともに起こるチェサの世俗化の進行を研究し、チェサの世俗化は、主体的な「定住」にむけての在日朝鮮人社会の新しい自己認識と再編成過程の現象であると述べている。100人以上のインタビューを通してのチェサの変容とチェサの継承についての詳しい研究であるが、一世たちの「集合的記憶」になかった仏壇が日本という地で儒教的祭祀と併祀される形式は検討がなされていない。本稿ではその部分を取扱いたい。

ヨルン・ボクホベン『葬儀と仏壇』⁸⁾では、仏壇の起源やなぜ仏壇に仏像や祖先の位牌が安置され人々が手を合わすのかを研究している。真宗では仏壇に祖先と死霊が宿るとされ、祖先に見守られるという考えを持っているという。裏返して祖先を祀らなければ死霊の迫害を受けるかもしれないという「恐怖」を持っているという世界観は韓国・朝鮮人の祖霊を大切に祀らなければ祖霊が鬼神となり子孫に害が及ぶという世界観と通じるところがある。

次に松原孝俊・玄丞桓「在日韓国人・朝鮮人の文化変容—特に九州において済州島人の祖先祭祀および民族宗教の変容を中心に—」⁹⁾がある。この論文では済州島出身者のチェサについてのインタビューを行い日本でやっているチェサの儀礼形式とチェサの変容について分析している。変容要因を済州島と日本の環境の違いとしているが、とりまく環境以外の内面的な変化も考察する必要がある。

次に、伝統的な儒教式チェサでは花は供えない。在日コリアンのチェサの変容のなかでも一部の人たちが花を供えることは象徴的であると言ってよい。チェサにおける供花は、花が欠かせない日本の仏教的葬礼文化や墓参りのなどの習慣や、日本のいけ花文化の影響を受けているためと考えられる。拙稿「在日コリアンの祭祀（チェサ）における供花」¹⁰⁾では、チェサにおける供花を通して、チェサを行う意味が孝の実践や祖霊を敬うためだけでなく、亡くなった人の〈いのち〉¹¹⁾とともに親族が集まり過ごす場、癒しの場、親睦の場となり、自分たちのた

めのグリーン・ケアの場となっていることを明らかにした。

これらの研究に見られるように、在日コリアンにとってチェサは何であるか、これからもチェサは継続するのか、継続するにあたってどのように文化変容し多様化してくるのか、日本に定住して世代が進んでいく現代のチェサはどのような意味を持っているのかという課題を通して、在日コリアンの世界観を明らかにしていきたい。

本論文では、在日コリアンのチェサに仏教的要素がいかに関与しているのか、その実態を把握するとともに、本来のチェサの持つ儒教的世界観に日本の先祖崇拜における仏教的世界観がどのように受け入れられたか、そのために起こったチェサの文化変容に関して分析する。

Ⅲ 研究方法

岡山市と倉敷市には韓国・朝鮮人が比較的多く密集して住んでいる地域があり、在日本朝鮮人総連合会（朝鮮総連）¹²⁾も在日本大韓民国民団（民団）¹³⁾の活動も盛んである。韓国・朝鮮人の在留者数は在日コリアンの数と同一ではないが、おおよその参考となる。『平成25年度版在留外国人統計』第4表には779市のなかで岡山市は17位2,980人、倉敷市は24位2,112人の韓国・朝鮮人在留者がいると書かれている¹⁴⁾。地方都市である岡山市、倉敷市に在日コリアンが多く住んでいる原因は植民地時代にさかのぼる。「1910年代、すでに岡山県の東洋館燐寸工場（1913年11月）、倉紡萬寿工場（1917年7月）、吉備織物工場（1917年9月）、倉紡玉島工場（1917年11月）では朝鮮人女工が「安価な労働者」として働いていた。1916年から1928年にかけて行われた伯備線（山陽本線倉敷～山陰本線伯耆大山）にも朝鮮人が多く動員された¹⁵⁾」

アジア・太平洋戦争の末期には三菱重工業水島航空機製作所（現在の三菱自動車）が空襲を逃れるために倉敷市水島に地下工場をつくったが、そこに多くの朝鮮人労働者が働いていたという歴史を持ち、終戦後も在日コリアンが集住していた歴史を有している。

このような地域であるが、特色のある在日コリアンの集住地区でチェサがどのように継承されているかを調査した。チェサを行っているか、どのような形で継続しているか、仏壇との併祀や祖霊についてはどうかなどについて15人から聞き取り調査を行った。実施日は2014年1月28日、29日、9月24日、2015年1月10日、2015年2月24日、25日である。インタビューをした15人の中で仏壇を置いていると答えた人は6人であった。この6人のインタビューを紹介する。

一方、前出の在留外国人総計によると韓国籍の在留外国人が最も多いのは東京の100,684人を抜いて大阪の120,889人である。その中でも生野区が26,532人と最も多く、次は東大阪市の12,276人である。生野区にある鶴橋の国際市場や朝鮮市場（コリアタウン）と呼ばれる市場にはチェサに供える食材が多く売られている。在日コリアンのチェサが顕在化している地域であり、チェサを行っている人も多いため、このような都会地におけるチェサの実態を知るために、2014年8月13日、9月3日、2015年8月1日、12日、9月12日、19日に聞き取り調査を併せて行った。大阪での聞き取りは16人であるが、仏壇を購入して、その前でチェサを行っている人はいなかった。ここでは夫の実家には仏壇があるという生野区の女性1人と仏壇の代わりに写真を置くコーナーを作りチェサを行っているという東大阪市の男性1人のインタビューを紹介

介する。インタビューは設問紙を作ってはあがるが、自由に話す半構造化形式をとり、チェサについての世界観を語ってもらった。

Ⅳ 在日コリアンのチェサ

葬祭文化・慣習のなかで最も大切なものに葬礼・法事がある。生まれ出た人は必ず死ぬものであり、新しい世界への旅立ちを親族らに葬礼という形で見送られ、死後も法事という形で追憶されることを望んでいる人は多い。在日コリアンが法事またはチェサと呼んで行ってきた祖霊を祀る慣習は朝鮮時代に広まった朱子家礼に則った儒教的なチェサであった。朱子家礼とは中国の冠婚葬祭の儀礼に関する朱子の学説を集めたものである。

小倉紀蔵は朝鮮は自己保全のために「中国化」という道を選んだとし「朝鮮は新羅の時代から中国化の度合いを深め、高麗時代（918～1392）には庶民の姓名も中国式になった。科挙を取り入れたのも高麗時代である。そして朝鮮王朝時代（1392～1910：ただし1897～1910は大韓帝国）になると、朱子学によって国造りを推進する¹⁶⁾」と記している。

朝鮮は朱子学を国中に浸透させた。国王世宗の命により1474年（成宗の時代）に『国調御礼儀』が作られた。チェサも朱子の家礼を基本にすえている。朱子家礼の祭祀の内容が士大夫の実践倫理として受容され、各地方または門中によって行礼方式が違う家家礼¹⁷⁾が形成された。しかし、チェサは家庭の中で儀礼を行うので地方や各家庭の状況に合わせた変容が見られるようになる。地方によって祭需¹⁸⁾が手に入らなかつたり、反対に手に入りやすい地域ではたくさん供えたりと少しずつの違いがある。「『朱子家礼』には具体的かつ詳細な説明がなく、『朱子家礼』の祭祀方式が中国の生活方式を盛り込んでいるので朝鮮に合うように解釈して、状況によって少しずつ変容してチェサを行ったからである¹⁹⁾」。

家庭で行われるチェサには忌祭、墓祭、茶礼などがある。忌祭は毎年故人の亡くなった日に祭るチェサである。墓祭は祖先のお墓の前に供え物を整えて祭るチェサである。今日では寒食（冬至から105日目にあたる日で、陽暦では毎年4月5日～6日あたり）及び10月に5代祖以上の祖先を祭る墓祭を時祭という。茶礼は一般に毎月1日や15日、節日などを期して祠堂²⁰⁾で祭る礼であるが、茶祠ともいわれる。日本植民地時代に祠堂の廃止が勧められ、共同墓地を作って墓の集団化が計られた²¹⁾。そして、茶礼と墓参のみ正月・お盆に限って行われた。

植民地時代は終わったが、祖国は分断され、民族同士が血を流す朝鮮戦争が勃発した。祖国の政情が不安定なこと、帰国しても生活基盤がないことなどで、多くの在日コリアンは帰国できないまま日本に留まることになった。自分たちが日本にいるのは間接的であれ、国が奪われたことに起因していると考える一世たちにとって、故郷では当然にチェサを行い、または参加すべき自分が故郷のチェサの場に行けないことがハン（恨²²⁾）である。少しでもそのハンを解こうという思いもあり、日本でチェサを大切に行ってきた。在日コリアン一世は自分の故郷で行われていたチェサの形式を守り伝え、二世、三世へと継承していくことを望んでいた。

チェサは祖霊が生きていた時と同じように食事をもてなし孝道を追うものであり、それは離別して孝を尽くさなかつた親への償いでもあった²³⁾。また、チェサを行うことは死者のためだけでなく生者を慰める儀礼でもある。一世が強い望郷の念を抱いていたのは、その故

郷にチェサを行う自分の血族である両親や兄弟が住み、または祖母や両親や祖先の墓があるという思いからである。儒教的な家父長制を重んじた一世は何よりも血の繋がった家族がいる場にたいする望郷の念が強かった。望郷の念が強い一世や戦前に生まれた二世たちの多くは、いずれ統一した朝鮮半島に帰ろうと考えていた。帰国しても子どもたちが困らないようにと母国語を学ばせ、慣習や文化を教えたりした。チェサは故郷の慣習や文化を子どもたちに学ばせる場でもあった。

日本にとどまった在日コリアンは法的地位も不安定で、日本社会から差別を受ける、周辺化されたマイノリティとして生き延びるしかなく、生活力を獲得していかなくてはならなかった。そのような生活環境の中で在日コリアンの多くが、祖国の統一こそが自分たちが日本社会での差別から解放され、自分たちの不条理な立場を解決する道だと信じた。朝鮮半島が二つの国に分断されたことにより、在日コリアンも北の朝鮮民主主義人民共和国を支持する総連と、南の大韓民国を支持する民団とに分裂した。親族、兄弟が政治思想の違いから対立する状況もみられることになった。しかし、チェサの日は特別で、対立していた者同士が祖父母や親のチェサの場に集まった。チェサの場は血を分けた者たちが一族として認識する場であり、何をおいてもチェサの場になくなくてはならないと考えられていた。そこでは儒教的な、年長者を中心とした秩序も守られてきた。

在日コリアンのそのようなチェサの様子が梁石日の短編小説『祭祀』に描かれている。

遠い親戚である金持ちのチェサに行った主人公が、総連・民団に分かれてチェサの客たちが揉めている場面を観察し「朝鮮人の慣習では祭祀をおろそかにする人間は最大の親不孝ものと見なされていた。むろん僕は祭祀などやる気は毛頭なかった」と語っている²⁴⁾。

李恢成の『死者の遺したもの』では、総連が組織葬を出すことに関して、民団に所属する兄と総連に所属する弟との立場の違いと葛藤が描かれている。

深沢夏衣の『パルチャ打鈴』では、久しぶりに実家に戻った主人公が、

「たしかにこの7年、法事²⁵⁾のために帰ることはあっても、それ以外に郷里に向かうことはなかった。そして、法事が終われば待っている仕事のため、待っている暮らしのためにそそくさと帰京していた」と語っている²⁶⁾。

在日コリアン文学のなかでチェサについて書かれたものは多くはないが、上記の引用からも、北と南、総連と民団と、支持する国が違って血族にとって、チェサは何があっても参加しなくてはならない大切な場と考えられていたことがうかがえる。

このように在日コリアンにとって、共同体の結束をもたらすチェサであったが、日本での定住が自明のこととなり、一世が日々減っていき、世代交代が進むにつれ、在日コリアンの共同体の意識が変化するのにもなって、チェサの意味も変化している。故郷と同じように儒教的チェサを行い、祖霊を大切に血族や親族が集まり、「考」を実践するというよりは、親兄弟や家族と一緒に食事をともにする場として意義があるという考え方に変わってきている。チェサの形式もそのような思想に合わせて多様化している。

在日コリアンのほとんどの家庭でのチェサの伝承方法は口承で行われ、チェサに参加して見て覚えるものであった。記憶をたぐりながら行う二世、三世のチェサは少しずつ変化している。もちろん、チェサについての手引書や書籍を購入して参考にする場合もあるが、チェサは家家

礼と言われるようにその地方や門中²⁷⁾や各家庭によって違う点が多いため、書籍等だけに依拠することも難しい。チェサが家家礼であるため、家ごとの集合的記憶が大切であるが、その集合的記憶も日本社会の影響を受けやすいといえる。

在日コリアン二世たち以降は日本で生まれ育ち、日本語を話し、日本の市民社会に適応していった。生活基盤も日本にあり、家族も日本に住んでいる状況のなかでいずれ祖国に帰るという意識を持つ人は少ない。そのため、日本社会で行われる仏教的葬礼と法事文化に接するなかで、それらを違和感なく取り入れて、日本に墓を建て、チェサを行っているコリアン家庭は少なくない。儒教的祭祀ではチェササンに花を飾ることはないが、日本の葬礼や法事では花が欠かせないからかチェサに花を供えることもある。日本人の知り合いが花を送ってくれた、故人が花が好きだった、と供える人もいる。また、仏壇を購入して、チェサの日は仏壇の前でチェサを執り行っている家庭もある。次に在日コリアンだけが行っているチェサの形式である仏壇との併祀の文化変容についての具体的な聞き取りを記す。

V 仏壇と祭祀を併祀している在日コリアンの聞き取り

岡山にてA氏、B氏、C氏、D氏（C氏の妻）、E氏の聞き取りを行った。

A氏 1952年生、三世、男性、本籍 忠清南道永洞、無宗教 長男

関西大学に通学しているとき韓国文化研究会に入り、民族ということを考えるようになった。現在は会社を経営しながら民団の仕事を手伝い、傍ら韓国人同士が出会うように結婚相談所の所長をしている。

4人兄弟の長男であり、弟1人（東京）、妹2人がいる。

岡山県の児島に生まれ現在も児島に住んでいる。私が長男なのでチェサを行っている。小さい頃からチェサを見てきて、ハラボジ²⁸⁾からおまえが引き継いでチェサをしなければならぬと教えられていた。ハラボジは4代奉祀をしていたが、アボジ²⁹⁾の代では祖父、祖母、20代で亡くなったコモ³⁰⁾のチェサと盆、正月の節祀（チョルサ³¹⁾）をしていた。法事はハルモニ³²⁾が仕切っていた。アボジは長男でチェサの進行を取り仕切っていたので幼い頃は「アボジは偉いな」と思った。家の中では長男は別格で、長男と次男とでは明らかに扱いが違った、と妹たちがよく言う。

幼いときもチェサは何をやっているのか意味も分からなかったし、意味を教えもしてくれなかったが、チョル³³⁾をすることだけは厳しく教えられた。

子どもの頃は旧正月など旧暦でチェサしていた。旧正月は2月頃なので何で今日がチェサだ？と聞くと向こうは正月だからと言われた。ハラボジが活着しているときは午後11時過ぎにチェサを始めた。ハラボジが死んでからチェサを早い時間にするようになり、夕飯前ぐらいにしていた。親戚がみんな来ていた。チャグナボジ³⁴⁾たちもチョルをするが、そのうち女性もチョルをするようになった。

一世が活着しているときは故郷とほぼ同じ時間（深夜0時）に開始できるよう午後11時半ぐら

いからチェサを開始していたが、一世が亡くなった家庭ではチェサの開始時間が早まる変容が見られる。これは夜中にチェサを行い、後片付けを終えると2時、3時になるので次の日の出勤や通学に支障をきたすからである。開始時間だけではなく、旧暦を陽暦に変える家庭も増えた。梁愛舜³⁵⁾と松原孝俊・玄丞桓³⁶⁾も聞き取りを通じてチェサの開始時間が早くなる変容について指摘している。梁愛舜はこのような変容を郷村社会の「聖なるもの」の世俗化と捉えている。A氏は続けて、

オモニは肝臓癌が原因で亡くなったが、オモニが活着しているときに仏壇を購入していた。オモニは近所にある真言宗の観音寺に相談して仏壇を購入して、その檀家に入っていた。近所の人はみんなそのお寺の檀家である。そのお寺は我孫子観音を祀っていて、本尊は四国の日光院である。檀家になると一回は高野山の西牟婁院に行かなくてはならない。信仰があるわけではないが、お寺から行ってくれと言われたし、付き合いでたった一度だけ行ったことがある。お寺がバスをチャーターして檀家さんたちと一緒にいった。熱心な信者さんは何回も行くようだ。

寺と檀家としての関係については、

お寺から彼岸前などにお坊さんがいつ行ったらよいかと葉書を送ってくれる。都合のよい日を書いて返事の葉書を出すと、お坊さんが来てお経を読んでもくれる。近所の人もみんなそのお寺の檀家なので地域のコミュニティに入って生きていくためにも必要だったのではないかなと思う。葬式を出すときも世話にならなくてはならないし、檀家になっている。

と語っている。

このインタビューではチェサを行いながらも地域コミュニティの一員として生きるためには仏壇を持ち、地域の寺の檀家になる必要があったことがわかる。母親は日本で弔ってもらい、息子が地域コミュニティに属して生きていくことを望んでいたと考えられる。

A氏は出張やどこかに行けばお土産を買ってきて仏壇に供え、チェサは仏壇の前で行う。仏壇もチェサもA氏の生活に密着している。

B氏 1939年生、二世、女性、本籍 慶尚南道、岡山市在住、宗教は儒教、長男の嫁 在日本朝鮮民主女性同盟³⁷⁾に所属

自分の宗教は儒教だと思っている。しかし、夫が60歳で亡くなった時、立派な仏壇を買った。毎日拝めるようにという思いだった。夫が亡くなって商売もうまく行かなくなったので、私たちが住んでいた大きな家も処分して、岡山市内に引っ越してきた。仏壇があるので毎日、夫に話しかけるし、商売もうまく行くように、家族が健康でありますようにと祈る。墓は

昔に住んでいた近所であって、今の家からは少し遠いが、月命日の日には必ず息子たちと一緒にお参りに行く。

仏壇を買った在日コリアンには仏教と儒教の混合という認識はなく、仏壇に位牌を置いても祖先が仏様の力によって浄土に導かれるとは信じてはいないようだ。仏壇は祖霊を祀る祠堂のように考えているようにも見受けられる。そのため儒教的なチェサは仏壇を買う以前と同じように行い、仏壇という位牌の安置場所を家の中に得たと考えている。そして仏壇という目に見えるものがそこにあることによって、毎朝祖霊との交信ができるようになった、と考えていることに特徴を見ることができる。B氏は仏壇に夫の霊を祀ることによって、夫が活着しているときのように話しかけて心の安寧を得ている。チェサは一年に一回、霊を招いて活着しているときと同じように食事をもてなすが、仏壇を家に置くことによって常に霊とともにいられるとの思いがあるようだ。

C氏 1952年生、二世、男性、本籍 慶尚南道、倉敷市在住、宗教は儒教 長男、日本人と国際結婚

自分は無宗教だと思っているが、敢えて言うなら儒教かな。親が神様と思っている。仏壇は15年前に買ったのです。そして、真言宗のお寺の檀家になった。こちら辺りはみんなそのお寺の檀家だ。アボジは59歳で亡くなり、オモニは50歳で亡くなった。両親は早くに亡くなったと思う。法事のやり方は長男やったし、アボジが教えてくれていた。アボジも長男だった。紙傍³⁸⁾はチェサが終わるとすぐに燃やす。それが何か寂しかった。だから位牌があった方がええんじゃないかと思った。自分の自己満足だけど、日本に住む以上は、祖先に手を合わせられるし、日本に墓もあるんだし、仏壇を置くのもいいのではと思って買いましたよ。お寺との付き合いは年一回坊さんがお経を読みに来るぐらい。



写真1 仏間で仏壇の前に儒教的祭祀の祭祀床を置いている。
2015年2月18日倉敷市にて撮影（撮影者C氏）

【写真資料1】

C氏は自分の思想は儒教で親が神様すなわち祖霊が神だと考えている。

日本において仏壇は仏教信仰のためのものとされているが、それだけではなく祖先祭祀のためのものでもある。柳田國男は日本人が長い歴史の中で「祖先」をどう理解していたかを考察し、

祖先祭祀が日本の信仰の根底にあると捉えた。柳田によれば日本でも、

ある武家の老夫婦は、明治も中頃に近くなるまで、盆の「魂祭り」の日は、黒の紋服を着て玄関の式台に座り、まるで「生き人」に対するような、改まった挨拶をした。

「まことに行き届かぬ御もてなしでございましたのに、よう御逗留下さいました。また来年もお待ち申します。」というような言葉をもっと長く丁寧に述べられた、ということである。それに「答えられる」とも「うなずかれる」とも思っていたわけではあるまいが、おそらくはこれが、代々のこの家の作法で、今日の教育とはちがって、「こう言え」「こう思え」と教える代わりに、自分で直接に実行して見せられたのであろう。

私などの家でも、もとは主人が袴をはいて、迎え送りに表口まで出た。³⁹⁾

と記し、先祖の霊が生きているように考え、子どもたちにも祖霊について教育していたことを記している。このような祖霊が生きているように考える日本の民間信仰はC氏の考えにも通じる。

D氏、(C氏夫人) 1954年生、女性、上記のC氏の妻、日本人、無宗教、長男の嫁 岡山在住

嫁いだときからチェサをするのは覚悟していた。鉄ちゃん(夫)⁴⁰⁾が韓国人で長男だと知っていたから……、仏壇を買うと聞いたとき、位牌を置く場所があるのは良いことだと思ったし、夫が出張に行っても紙傍を書かなくても位牌を置いて(チェサを)出来るからいいと思った。

そして、何かあったらお寺のお坊さんに相談できるから安心だとも思った。だから、私の家では韓国式と日本式がごっちゃだと思う。チェサするのにお坊さんは来るし、夫は出かけたらず必ずお供えを買ってきて仏壇に供えている。毎朝、仏壇に挨拶もしている。

私は、仏壇があるほうが亡くなった人も落ち着くんじゃないかと思う。仏壇にはお水とシキビ(櫛)だけ供えている。

チェサの料理はハンメ⁴¹⁾が教えてくれた。韓国語で話すので意味が分からなかったから覚えるまでが大変だった。ハンメは嫁(夫の母)も亡くなっているし、孫嫁の私に教えないとチェサが途絶えると考えていたようで私に必死に教えようとする気迫が感じられた。

チェサのときは必ずハンメは台所で一人祈っていた。韓国語でぼそぼそ言っていたので意味は分からなかったけど、家族の健康と鉄ちゃん(夫)のことを祈っていたと思う。それで、私も鉄ちゃんを見守ってください。鉄ちゃんが健康でありますようにと台所で祈っている。チェサは旧暦でするのでカレンダーにチェサの日を書いておく、しかし、負担だとは全く思っていない。チェサは私の生活の一部になっている。

最近あまりチェサの料理を好んで食べないから「何が食べたい？」って親戚の子に聞いて、エビフライなどを作って供えたりしている。お供えものや始まる時間は変化している。

10年前までは夜中3時頃まで片付けをしていた。最近は1時過ぎに終わる。

チェサを終えて、お風呂から上がると夫はいつも「ご苦労さんやったね。」とねぎらってくれる。大きな仕事を終えたとほっとします。

彼女は仏壇があるということに安らぎを感じている。彼女自身は日本人であり、仏壇がある家庭で育ったのでチェサがあるのに仏壇を買っていいのかと一瞬思ったと言うが、仏壇の前でチェサを行うことに何の違和感も感じていない。チェサ文化の韓国人の家に嫁いだが、仏壇があることによって自分は落ち着くという。しかし、自分が継いでいくと決心してチェサの料理を学び、ハンメの精神世界に接することによって、ハンメと同じように祖霊を信じ、チェサの日には亡くなったハンメに代わって祖霊に家族の安寧を祈っている。⁴²⁾ チェサの料理を準備する女性たちの負担は大きい。しかし、D氏はチェサは大変だが無事終わると達成感を覚えるという。

E氏 1977年生、三世、本籍 慶尚南道、倉敷在住、長女、無宗教、夫と夫の家族はキリスト教

ハルモニの家では小学校1年ぐらいから仏壇があった。仏壇があるのが当たり前だと思っていた。真言宗である。お坊さんが来てお経を読んでくれる。ハルモニが毎朝ご飯とお水をお供えしている。だから、仏壇があって、チェサをするのが韓国人の長男の家では当たり前だと思っていた。アボジが三男なので自分の家に仏壇があるのではないし、チェサもハルモニの家ですけど、いろいろ事情があって私のオモニがハルモニのところに行って、すべてのチェサの準備をする。だからか、みんな私のオモニに頭が上がらないみたい。私も嫁に行くまでチェサの準備を手伝っていた。チェサの料理も出来ないようだったら嫁にいけないと親戚のおばさんたちに言われて育った。でも、恋愛して結婚した人の家がクリスチャンだったので韓国人だけチェサがない。ちょっと残念だ。チェサの準備をちゃんと出来るのと思う。私はチェサのある家に嫁いでいたら、きっと張りきってチェサの料理を準備していたと思う。

彼女は夫と岡山に住み、法律事務所を開業しているが、夫の実家は東京にある。嫁ぎ先はクリスチャンでチェサがないのは寂しいが、ハルモニの家も近く、チェサがあるときは夫婦で参加する、と語っていた。チェサに祖霊が来るとかはあまり考えたことがないということである。仏壇を置きチェサを行う姿をハルモニの家で見えてきて、その形と儀礼、チョルをするのが在日コリアンの文化だと考えていた。仏壇とチェサの併祀が彼女には集団的記憶として蓄積されている。チェサをしないクリスチャンの家に嫁いだので自分はチェサをすることは無いが、チェサのある家庭に嫁いたら、自分が教わったようにチェサをしたらろうと語っている。親戚の女性が集まり、料理を手伝いながら料理方法と味を覚え、それと同時に女はチェサの料理が出来なくてはならないという価値観を受け継いでいる。しかし、このようにチェサの料理を学んだ三世の女性たちもチェサをしない家や、日本人と結婚するなどして、チェサの継承が途絶えていくのもチェサの非連続性をもたらす要因のひとつだといえる。チェサの連続性と非連続性についての研究は今後の課題にしたい。

次は、仏壇を引き取りたいが四男なので引き取れない立場であるため、仏壇の代わりに写真

を置く場所を作り、仏壇があるのと同じように毎朝お茶などを供えて亡くなった親に話かけている家庭である。以下のインタビューは大阪において行った。

F氏 1944年生，二世，男性，本籍 慶尚南道，東大阪在住，四男

兄弟と折り合いが悪く，仕事のことで裁判沙汰になった。縁を切って，それぞれ各自がチェサをすることになった。

父親は丹波のマンガン鉱山⁴³⁾で働いていた。その後，生野区に移って魚屋，養豚，鉄工所などいろいろな仕事をして苦勞したらしい。自分のすぐ上の兄とすぐ下の弟が死んで辛かったからか，母親は生野区の難波寺に行くようになり仏壇を買った。両親が亡くなって，兄弟とも縁を切ったので仏壇を拝みにいけなくなった。自分は四男だから仏壇を継げないので，家に母親の写真を飾る場所を作った。妻が毎朝一番にお茶を供えている。自分たちが旅行などに出かけるときは近くに住む娘に「お水でもいいから毎朝供えてくれ」と頼んでいく。【写真資料2-1，2-2】

毎日果物を供え，どこかに出かけたら必ず手みやげを買ってきて供えている。花も欠かさず供えている。仏壇の代わりのようなものだと思う。どうしてするのかと言うと母親が見守ってくれていると信じているからだ。昔の人は長男，長男というけど，四男でも親を思うならチェサをしても良いと思う。兄貴の所のチェサに行きたくない。親はあっち行ったり，こっち行ったり忙しいと思うけど仕方がない。儒教は長男を特別だというのは良くない。親を大切にするのは兄弟みんな同じだと思う。



写真2-1 2016年7月12日東大阪にて撮影（撮影者は金直子氏，在日3世）

息子の友人の僧侶が持って来た軸を掛けて写真を置き果物などを供えている。



写真2-2 チェサの日はチェサの料理を供える。

本来は長兄の家に男兄弟家族が集まりチュサを行うものだが、いろんな理由で兄弟が仲たがいをし長男の家に集まってチュサをしなくなった例も少なくない。その場合は下の兄弟はチュサをしないが、親を思う気持ちから自分の家族だけでチュサを行っている家庭もある。インタビューに応じてくれたE氏は母親の写真を置いているところは仏壇と一緒に考えている。仏壇のように毎朝お茶も供え、果物も供える生活もしている。しかし、ある仏教の宗派を信じているのではなく母親の加護を信じているのである。矛盾なく仏教的仏壇の形式とチュサという儒教的儀礼が結びついたものが在日のチュサの形だと考えている。E氏の妻の実家はチュサがなかったので、夫の母親が教えてくれたチュサの儀礼方式と料理を覚えた。その姑がなくなり、四男だけれど自分たちだけのチュサを行うことになったが、チュサの儀礼形式をよく知らないで何の疑問も持たなかったという。E氏の妻も家に舅と姑を祀っているので自分たちを見守ってくれていると信じている。

しかし、このような日本仏教そのものが儒教的だという意見もある。日本仏教の歴史をかえりみて、加地伸行は日本仏教が儒教的だったと、次のように記している。

儒教におけるその祭祀の場は一族の長の家にある宗廟⁴⁴⁾である。だから、家とは別に作られた寺院(仏教)や道観(道教)や教会などの集会所は不要であった。その宗廟は後に祠堂や祠壇となり、それを取り入れた仏教は祖堂を作る。さらには日本では仏間ともなる。その仏間に置かれた仏壇が一般化され、今日はいわゆる仏壇として一般家庭に普及している。換言すれば、儒教的仏教、あるいは仏教的儒教、これが日本仏教の大半の姿なのであり、そのような形で日本人は儒教シャーマニズムを仏教においても実質化してきたのである。もちろん、日本仏教は100パーセント儒教ではない。一割が救済を求めてのインド仏教、一割が現世利己的幸福を求めて祈祷や護符をいただく道教、八割が祖先祭祀(先祖供養・墓・葬儀)の儒教である⁴⁵⁾。

とすると祖先祭祀の儒教部分は在日コリアンが行う儒教的祭祀が容易に融合できる接点を持っていたものと考えられる。

日本で生まれた在日コリアン世代は日本社会で教育を受け、日本社会で育ったので、仏壇に対する認識は日本人と特別変わっている訳ではない。概ね上記とおなじような認識を持っている。ただし、仏壇が仏教的なアイテムであろうと、自分たちの世界観に合うように仏壇の意味をどう付与するか、自分たちの思想・感情に合うように仏壇をどう考えるか、自由に選択できる立場である。実際に仏壇を購入してお寺との関係を持ち、僧侶を家に招きお経を唱えてもらっていても自分は無宗教だと考える人がいる。

また、日本仏教の主な部分が葬儀や祖先祭祀を祀ることにあるという側面は在日コリアンにも違和感なく仏壇を受け入れやすいと考えられる。

しかし、仏壇のある家に嫁いで仏壇の前でチュサすることに違和感があり、また、儒教の男尊女卑にも問題意識を持っている在日コリアンもいる。G氏はチュサと仏壇の併祀はおかし

いと考えている。

G氏 1955年生，二世，本籍 済州島，大阪生野区在住，長男の嫁

嫁いだ先はチェサがあったので，夫は長男だし私がチェサをしていました。姑はチェサの食器や道具類を私にすぐ譲りました。姑は年末年始に法事をするのが負担だったようです。チェサを何十年も続けてきてしんどかったのですよ。

女は夫の先祖の霊を敬いチェサをする。自分の祖先の霊ではないのですよ。

在日コリアンの葬儀は仏教的に骨上げして自分の家に持って帰ってくるとチェサをする。儒教式だというけど儒教が何かについては教えてもらっていない。それはおかしいと思う。夫の家は仏壇の前でチェサをする，それ自体がおかしい。それは，自分たちが地域のコミュニティのなかで生きてきたからだと思う。地域との付き合いがある。もう一方で在日韓国人の家に嫁いできてチェサはしなくてはならないという義務がある。嫁の精神的負担が大きい。日本では時代の流れで，チェサを継いで行くのが難しいと思う。

最近はお寺でお葬式するじゃないですか，典公会館のようなところでしてもお坊さんを呼ばないと遺骨を引き取ってくれるところがない。遺骨は世話をしなくてはならない。49日過ぎて墓に入れることができる人は良いけど，そうじゃない人は遺骨を預けることができない。葬式の時にお坊さんと呼んだったら，呼んでくれたということで遺骨を預けることができる。遺骨を家に置いていたら世話をしなくてはならないし，家に置きたくないという人もいる。お寺は檀家制度で檀家だったらお葬式もやるけど，そうじゃなければやってくれない。お金もかかるから檀家制度は無くなると思う。嫁ぎ先は月命日には必ずお経をあげにくるし，正月，盆にはお金を渡す。お寺を修繕すると言ったら，また，お金も出さなくてはならない。そうしながらチェサもする。おかしいでしょう。感覚的に理解できない。仏壇を置いてお寺の檀家だったら，日本人のコミュニティには入れるというか，ちゃんとしている人だと思われようと仏壇持っているのかしら。

仏壇も法事もいったん始めると簡単に捨てられないし，やめられない。

嫁ぎ先には仏壇があるけれど，夫は仏壇が嫌い。夫は浄土真宗でもなんでもなし。夫が仏壇をやめる，檀家を抜けると言ったとき，他の兄弟から文句が出る。なんか仏壇をちゃんとしているから，祖先の霊に守られていると思っているのにと。家に御札を貼っていたら，なんか無病息災でいられるように思う人ってあるじゃないですか。

と自分には宗教心はないとしながらも，仏壇を宗教的な信仰の対象として勝手に処分することは出来ないと考え，また，祖霊が自分たちを守ってくれると信じる兄弟たちの考えも尊重して，否定はしていない。しかし，災いがあると血のつながっていない嫁に責任を押し付ける家父長的な男尊女卑の考えには強く反発している。儒教の男と女，親と子，兄と弟で明確な序列をつくる考えに対しては反発もしているが，チェサを押し付けられる長男や長男の嫁の立場を尊重しない現代の風潮にも不満を抱いている。チェサと仏壇の併祀に否定的でありながら，親たちが信じているチェサの聖性を否定することもできない。嫁の立場では率先して仏壇を祀ることを辞めることも出来ないと考えている。日本社会のなかでチェサを行う難しさを肌で感じ，息

子にはチェサをしなさいとは言わないと語っている。チェサはいずれ無くなるのではと思いな
がらも自分がチェサの連続性を断ち切ることはできないという葛藤が感じられた。

Ⅵ おわりに

家に仏壇を置いてあるということは、日常に祖霊と接し交信することができるということ
である。そうすることによって亡くなったものと繋がり、身内が亡くなったために起こる喪失感
が緩和され、心のケアができる。

日本で墓を持ち仏壇との併祀を行うことによって日本の歳時記と合わせた生活をするこ
とができる。日常生活で祖霊を祀ることにより、忌日を忘れずにチェサをすることができる。また、
家家礼の名のように中国の朱子家礼のチェサ儀礼を朝鮮半島に合うように変えてきた。

在日コリアンは日本の社会環境に合わせてそれぞれの家庭に合わせてチェサを変容してい
るのである。では、若い世代はそのようなチェサをどうみるのだろうか？

在日三世3人との対談で「アイデンティティの葛藤、あるいは自分の存在意識を確認したい
と感じたことはありますか？」という質問に対して李志善は次のように述べていた。

祖父母たちの生い立ちがみな違いすぎて……。だから小さい頃からチェサ（祭祀）もするし、
日本の法事もするし、南無阿弥陀仏も唱えていました。それは当たり前のことだと思って、
自分の中では自然と消化されていたので、アイデンティティの葛藤っていうのはあまりな
かった⁴⁶⁾。

在日二世のインタビューのなかでも一世から儒教的思想やチェサについての説明などはあ
まり教えてもらっていないという。一世にとっては当然に理解していると思われる儒教的世界観
は環境の全く違う、時代も違う二世には完全には引き継がれず、そのため、日本の仏教的世界
を柔軟に受け入れたとみられる。まして、三世になるとその世界観はより多様化している。

以上の在日コリアンの聞き取りから仏壇をもつ動機は以下のように整理できる。

地域コミュニティの成員がそのお寺の檀家であることから自分たちも檀家になるのが自然
である。葬祭をきちんとしている家だと見られる。違和感なくコミュニティの一員でいられる。
仏壇を持ち彼岸には墓参りをすることで外見の葬礼や法事は潜在化することができる面もある。
近隣地域社会とつながり地域市民として近隣の日本人とうまくやっていきたいという心情は日
本での定住志向から来るものと読み取れる。特に二世以降は日本に生まれ日本に骨を埋める覚
悟であり、一世と違って日本を客地とは見ていない。そのため、仏壇を日本的なものとはばかり
捉えずに自分たちの文化に取り入れて、仏壇というツールを使い、祖霊をより身近に祀りたい
という在日コリアンの心情が伺える。仏壇はあくまで祠堂のように神主（位牌）の安置場所⁴⁷⁾
であり、チェサの日に先祖をお招きして食事をもてなすように、毎朝、先祖と交信する場と考
えている。また、祖霊こそが自分たちの生との連続であり、祖霊こそが安寧を約束し、よりよ
い人生を約束してくれると感じているという。

これは、仏壇の使用を変容して、仏教的形式を儒教的世界観で解釈したともみられる。また、

儒教的祭祀と仏壇を融合させて自分の受け入れやすいように解釈してチェサを続けている。それは、「日本仏教が儒教シャーマニズムを取り入れているのは東北アジア人の死生観（招魂再生。魂降しによる現生への帰還）にこたえるためなのであって、それを象徴するのが〈葬式仏教〉である⁴⁸⁾」と加地信行が記したように葬式仏教も儒教的チェサも祖霊を現生へ招き祭祀する死生観を持っているからである。ヨルン・ボクホベンも日本では仏壇に祖霊が宿ると考えている人たちがいると記している。

一世の世代のように、言葉や慣習が違うため日本社会にも馴染めない、居住問題や就職でも強い差別を受けていた時代ではなく、二世以降の在日コリアンは会話に問題がなく、日本での基盤もでき、就職差別などの問題もある程度の解決があり、市民コミュニティにも編入されて生活しているかのように見えるが、実のところは不安定な生活を送っているのが現状だ。在日コリアンは朝鮮籍・韓国籍を問わず、朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国の政治・経済動向に影響される。隣接国ゆえに毎日のように報道される朝鮮半島のニュースなどに日本人社会の視線を感じて鋭敏にならざるをえない。良い報道のときはよいが、悪い報道のときは気を揉む。このような日本社会で、在日コリアンがチェサを行い、仏壇を取り入れて祖霊に祈りを捧げるのは、自分たちが心の安寧を得て、日本で生き延びて行く知恵なのかも知れない。チェサと仏壇の併祀は在日コリアンが戦略的に選び取ったハイブリット型の祀りの形であるということが出来る。在日コリアンにとって日本は祖国ではないが異国でもなく、客体化できるものでもなく、一体化できるものでもない。しかし、在日コリアンは地域の市民として潜在化して生きていることがチェサと仏壇の併祀からもみとれる。自分たちの生活環境に合わせて変容したチェサが継承されていくなら、それも受け継がれていく在日文化と考えられる。そして、日本の儒教的祭祀と融合またはハイブリット化が在日コリアンのチェサ文化を次世代へと引き継がれていくのに寄与している面も忘れてはならない。確かにチェサは変容しているが、それでもチェサは在日コリアンの祖霊を祀る儀式であり、祖霊に食事をして頂く儀式であり、自分たちのルーツの確認の場であるという本質は変化していないのである。

注

- 1) 延世 韓国語辞典 初版（トゥサントニア出版、1998年）
- 2) 在日コリアンをディアスポラと呼ぶかという点について議論されている点もあるが、ロビン・コーエンはサフランの規定から拡張すべきとして、原型的なユダヤ人ディアスポラの伝統からかけ離れているが「ディアスポラのカテゴリーに入れたい第一は、植民地のためあるいは自発的理由で離散する集団である」と述べている。ロビン・コーエン著『新版グローバル・ディアスポラ』（明石書房、2012年）34頁
- 3) スティーブン・バートベック『トランスナショナリズム』水上徹男、細萱伸子訳（日本評論社、2007年）、198頁
- 4) 在日コリアンには種々の宗教団体に属している人もいる。聞き取りの中でもチェサをしてない人も少なくなく、クリスチャン、仏教を信じる人、創価学会、統一教会などに所属する在日コリアンもいた。本論文では紹介していない。
- 5) 仏龕（ぶつがん）－仏像を安置する厨子
- 6) 祭祀床（チェササン）－祭祀の供え物を準備して並べたお膳や机
- 7) 梁愛舜「チェサと在日朝鮮人社会－世代交代と世俗化を中心に－」『立命館産業社会論集』第36巻

- 第2号, (2000年) : 63-92頁
- 8) ヨルン・ボクホベン『葬儀と仏壇』(岩田書院, 2005)
 - 9) 松原孝俊・玄丞桓「在日韓国人・朝鮮人の文化変容-特に九州において済州島人の祖先祭祀および民族宗教の変容を中心に-」『比較社会文化』第2巻(1996年) : 163-175頁
 - 10) 李裕淑「在日コリアンの祭祀(チェサ)における供花」『いけ花文化研究』第3号(2015年) : 69-86頁
 - 11) 〈いのち〉とは小倉紀蔵が述べる「肉体の生命がおわったあとも、〈いのち〉は永生する(永遠に生きる)ということなのです」をさす。参照文献、小倉紀蔵『〈いのち〉は死なない』(春秋社, 2012年), 75頁
 - 12) 在日同胞の朝鮮民主主義人民共和国への結集, 祖国の平和的統一, 在日同胞の民主的民族的権利の擁護, 民族教育の実施, 日朝親善と世界平和への貢献などを綱領としている民族団体。
 - 13) 大韓民国を支持する在日コリアンで構成された民族団体。通常、民団と呼ばれている。在日韓国人の民生安定, 文化向上, 国際親善などを綱領としている。大韓民国を支持する在日韓国人の団体。2005年からは国籍にこだわらず, 朝鮮半島にルーツを持つすべての人々が団員になれるとしている。
 - 14) 入管協会(平成26年1月31日発行)「第7表 国籍・地域別 市・区別 在留外国人」『平成25年度版 在留外国人統計』(財団法人入管協会, 2014年), 200頁~219頁
 埼玉県さいたま市 3495人, 川口市 3248人, 東京都特別区 84,747人, 千葉市 3,969人, 仙台市 2452人, 札幌市 2681人, 福岡市 6305人, 北九州市 6082人, 下関市 2956人, 広島市 6406人, 西宮市 3819人, 神戸市 19,686人, 伊丹市 2148人, 東大阪市 12,276人, 八尾市 3584人, 豊中市 2257人, 大阪市 76,738人, 京都市 24,279人, 大津市 2227人, 春日市 2251人, 名古屋市 19,105人, 川崎 8448人, 横浜市 14,551人
 - 15) 朝鮮人強制連行真相調査団編著『朝鮮人強制連行調査の記録 中国編』, (柏書房, 2001年), 174頁注として(農商務省工場監督官吉坂俊蔵『調査報告書』1917年11月)とある
 - 16) 小倉紀蔵『創造する東アジア 文明・文化・ニヒリズム』(春秋社, 2011年), 293頁
 - 17) 家家礼(カガレ) - 家ごとに違う礼儀作法や家風『朝鮮語辞典』(小学館, 1993年) 2頁
 - 18) 祭祀用の供え物, 供物, 祭物
 - 19) 国立民族博物館『韓国の祭祀』, (国立民族博物館, 2003年), 135頁
 - 20) 祠堂(サダン) 祖先の神主を祀る家, 家廟ともいう。王室は宋廟と呼ぶ。
 - 21) 任東権『韓日民俗文化の比較研究』, (岩田書院, 2003年) 60頁
 - 22) 恨(ハン) - 単に怨みの要因によって他者に復讐しようとする感情ではなく, 悲痛な経験, 悔しさ, 言われなき差別や抑圧などの要因で心に蓄積された感情。
 - 23) 松原孝俊・玄丞桓 前掲論文 : 171頁には「蛆上を追慕できない自身の自責の念で行う」としている。
 - 24) 磯貝治良・黒古一夫『在日文学全集7 梁石日』(勉誠出版, 2006年), 61頁
 - 25) ここでの法事はチェサをいう。在日コリアンはチェサを法事と呼ぶ人もいる。
 - 26) 磯貝治良・黒古一夫『在日文学全集14』(勉誠出版, 2006年), 167頁
 - 27) 門中(ムンジュン) - 族の者
 - 28) 父方の祖父
 - 29) 父
 - 30) 父の女兄弟,
 - 31) 季節・節日(元旦, 端午, 重陽など)に行う祭祀
 - 32) 祖母
 - 33) お辞儀の韓国語, 他人に体を曲げて慎み敬う気持ちを表すお辞儀。またはその気持ちを表す礼。慎み敬う気持ちにしたがって礼をあらわす方法が違う。祖先・両親には最も丁寧にお辞儀をする。
 - 34) 父親の弟
 - 35) 梁愛舜 前掲論文 : 72頁

- 36) 松原孝俊・玄丞桓 前掲論文：171 頁
- 37) 在日同胞女性の意思と理念を代表する大衆団体として 1947 年 10 月 12 日結成された。在日本朝鮮人総聯合会の傘下団体。www.chongryon.com 参照
- 38) 紙傍紙で作った神主、祭礼などを行うたびに紙に書き、祭礼が終わると燃やす。
- 39) 柳田國男『新訂 祖先の話』（石文社、2012 年）、211 頁
- 40) 夫を「てっちゃん」とよんでいる。とても仲の良い夫婦である。子どももないから仲良くしなくては、と話していた。
- 41) 祖母を指す方言、ここでは夫の祖母を指している。被調査者の姑は嫁いだ時には亡くなっていたので、祖母からチェサのしきたりや料理を教えてもらった。
- 42) 台所で家族の安寧を祈るのは、巫俗や民間信仰の影響だと考えられる。
- 43) 丹波はかつてマンガンの国内有数の産地で 300 以上の鉱山があった。戦時中は朝鮮人も採掘作業にあたった。文字を知らない朝鮮人は塵肺になっても労働災害補償の申請もできなかった。参考文献、李龍植『丹波マンガン記念館の 7300 日』（解放出版社、2009 年）
- 44) 韓国では宋廟とは歴代の王と王妃の位牌を奉る祠堂を指し、家庭に設けられるのは家廟と呼ぶ。
- 45) 加地伸行（1998）『家族の思想 儒教的死生観の果実』（PHP 新書、1998 年）、60 頁
- 46) 李修京編『海を越える 100 年の記憶』（図書新聞、2011 年）、278 頁
- 47) 朱子家例に則って、朝鮮時代には祠堂を建てるのが強要された。そこに四代までの位牌を置く。儒教が広まると祠堂を建てる風習が庶民にまで広まった。
- 48) 加地伸行、前掲書籍、61 頁

